
化物語－忍野ゲンガー－

soku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化物語－忍野ゲンガー－

【Nコード】

N5143T

【作者名】

soku

【あらすじ】

今にも崩れそうな廃塾の一室。小汚くて胡散臭い中年のおっさんはあまりにも暇なので、昔話を独白することにした。そんなお話。

(前書き)

「化物語」二次創作です。原作読了推奨。

(1)

たまに自分は生まれた時から自分だったなんて言う人がいるけれど、実際そんなことはない。何の影響も誰の影響も受けずに成長したなんて思っている人がいるなら、ただただ笑うしかないね。先天的と後天的という言葉があるけれど、そのとおり、人間には「持って生まれたもの」と「身に付けたもの」がある。いや、先人は本当にいい言葉を生み出してくれたね。

もちろん、僕も例外じゃない。僕、つまるところの忍野メメも最初から「怪異の権威」だったなんてことはないってことさ。まあ言われなくてもわかっていいるとは思うけどね。

ただまあ、僕のそれなりに大切にしている友人阿良々木君のように僕を特別視する人がいることがいるのも事実だから、やっぱり多少は説明しておくべきかな、と思うわけだ。

愚昧なる僕が精一杯考えた（あと気が向いた）末の行動だから、鬱陶しがらずに聞いてくれると嬉しいね。

はは、お前のことなんて知りたくないって？

全く最初から元気いいなあ。何かいいことでもあったのかい？

まあ確かに僕の外見は往々にして冴えないという評価をされる（阿良々木君に至っては「小汚くて胡散臭い中年のおっさん」なんて言うんだよ。あれは酷いよね）けれど、アニメ化に伴って随分と手心を加えてもらってさ。一部ではファンもできちゃって。はっはー、人気者は辛いね。

まあそれに、僕が人気者かどうかなんてことは抜きにしても、人の話は聞いておいた方がいい。

世の中にはありとあらゆる要素が溢れていて、僕たちはそれらを取捨選択しながら生きている。天才という言葉があつて実際天才にはかなわないことなんていくらでもあるのだけれど、成功した人が必ずしも天才と限らない。最終的に人格つてものが形成されるにあつて重要なのはそんな先天的なものよりむしろ後天的なものなのさ。天才が鳴かず飛ばずつてこともあるし、大器晩成つてこともある。

それじゃあ成功した人は成功するファクターだけを与えられたのかと言えば、はたまたそうじゃない。意外とね、同じ道を歩いていたはずなのに、なんてことは往々にしてあるんだよ。

じゃあ何が違ったかと言えば、それは「使い方」なのさ。例えるなら携帯電話かな？ 僕なんかはあれで電話をかけるくらいで精一杯だけれど（携帯”電話”なんだからそれで充分だと僕は思うんだけどね）、メールを送ったりインターネットができたり、テレビまで見られるらしいじゃないか。全く”でじたるでばいど”もいいところだよ。

まあ結局何が言いたいかと言うと、ここで「忍野メメの与太話」という要素が君に加わったところで、それをどうするかは君次第で、いらないければ切り捨てればいいし、必要なら好きなように使えばいいってことさ。

ダメな人間の話はダメな話だなんて偏った見方をしてたら損なんじゃないかと僕は思っちゃうわけ。もしかしたら僕の話で君を成功へと導いちゃうかもしれないわけさ。はっはー、僕もRPGでいうところの賢者ポジションだね。

あ、一応言っておくけど、僕はこれで君に恩を売っているつもりはないからね。だって僕は僕の話をしたくてするだけなんだから。仮にもしそれで君に大きな影響を与えたとしても、それは君が勝手にそうなっただけさ。僕の知ったことじゃない。

まあ、僕は僕の話が本当にそんなに大きな影響力を持つとは毛ほ

ども思っていないんだけどね。

さて、随分と話が脱線してしまった。いやあ歳を取るとだめだね。語りたくなっちゃってさ。中年でこれなんだから壮年になったら…。おっといけない。またまたやってしまうところだったよ。いい加減僕の話しよう。

僕と、彼女の話。

(2)

強い雨の降る夕方だった。

僕は薄暗くなった高校の昇降口に座りこんで途方に暮れていた。

雨脚は強く、いくら待っても一向に止む気配はない。

こうなれば選択肢は2つ。ただひたすら止むのを待つか、濡れて帰るか、である。

待った場合について考えてみよう。辺りは暗くなる。もしかしたら雨が止むかもしれない。止まないかもしれない。仮に止んだら濡れずに帰れそうだが、そうでなければ濡れながら暗い道を独りで惨めに帰るほかない。濡れずに帰るか、時間を浪費した上に濡れて帰るか。

む、どちらにしても濡れて帰るのではないか。同じように濡れるならば、薄暗かろうが真っ暗だろうが関係ないではないか。そして少しでも濡れずに帰ることが出来る可能性があるのは…？

結論がでた。

そもそもなぜこんな時間まで高校にいたのかと言えば、まあこんな言い方をすれば教師陣は怒るかもしれないが、進路指導と言う名の進路強制を受けていたからである。

まあ公立高校なんて所詮そんなものだ。一人の東大生を輩出するよりも、一人も浪人生を出さないことの方が大切なのである。私立高校と違って際立った個性を主張できない以上、進学実績での自己主張しか道がないのだ。入学説明会で延々と語られる大学の話を聞きながら、同情に近いものを感じたのを今でも覚えている。

進路指導では大抵の場合、国公立大学への進学が求められる。そして僕も例外ではない。僕の第一志望は完全に否定され、地元大学への進学を推奨されていた。気持ちにはわかる。国公立大学という響きはいつだって魅力的だ。なんとなくそこの大学に進学するくらいなら、なんとなく国公立大学に進学しておいたほうが将来的にも無難だ。

そして僕も例外ではなく、なんとなく進学なんて書いてしまったものだからなんとなくこの大学に行くかと選ぶはめになったのである。

しかし往々にして、なんとなく大学に行くということはすんなりとはいそうですか、頑張ってるね」とは言ってもらえない。

その日も進路指導室で延々と、なんでその大学に行きたいのか？何を学びたいのか？将来何の職業に就くつもりなのか？と教師から質問攻めを食らったうえ、進路希望調査用紙をつき返されてきたというわけだ。何が希望だ。進路絶望調査の間違いだろう。

「忍野くん、まだ残ってたの？」

僕が昇降口の冷たい床の上に仰向けになって惰眠へと落ちていくところ、突然黄色い声が投げかけられた。しかし僕は眼を開けるのも面倒だったものだから、とりあえず無視した。

「しかしよくもまあ：こんな硬い床の上で仰向けになれるわね。どうせ傘持っていないから帰れないとかそんなところでしょ？ 私持つてるから一緒に帰る？」

黄色い声は呆れた様子で話し続けた。もちろん僕は第一声の時点

で声の主には気付いていたし、だからこそとりあえず無視なんて選択肢を選んでも彼女が怒らないこともわかっていた。

「やぁ前髪ちゃん。待ちくたびれたよ。君が僕に傘を差し出してくれるのをどれだけ待ちわびたと思っていたるんだい。」

僕はうつすらと目を開けて声の主を確認する。僕の足元に立って見下ろす女の子。眉の下で直線の前髪。間違いなかった。

「む、相変わらず見透かしたような言い方をする上にこの前髪を馬鹿にするのね忍野くん。きつとあなたが独り身で中年になったところにこの前髪は世間に認知されているわよ。あなたは流行に乗り遅れたのよ。せいぜい後悔するがいいわ。」

と彼女は胸を張る。貧乳はステータスというが、巨乳は財産だな、と彼女を見るたびに思う。

「女子高生の間で直線前髪が流行っていたとしても僕は興味ないね。あと僕は馬鹿にはしていないよ。実際僕は僕が中年になった頃吸血鬼の男の子が前髪が直線な女の子を僕のところに連れてくるような気がしてならないんだ。ま、僕はそれより金髪幼女なんかがいてくれたほうが嬉しいんだけど。」

僕は適当なことを返しつつ床から体を起こす。寝方が悪かったのだろうか。尾てい骨あたりが痛い。

「別にあんたの趣味なんてどうでもいいわ。それで、一緒に帰る？ 帰らない？ この夜明暁は気が短いわよ。」

と、ぐいっと傘の先を僕の眉間へと付きだしてきた。危ないっつの。

「それは愚問だなぁ前髪ちゃん。雨に降られた人間が都合よく傘を差し出されているのにそれを断るだなんて、僕はそんな贅沢な真似が―」

「要するに一緒に帰るんでしょ。もう相変わらず…。あ、言っとくけど特別元気がいいわけでもないし、何かいいことがあったわけでもないわよ?」

決め台詞が…。

僕は目の前の傘の先を掴みながら立ち上がる。暁は女子の中では背が高い部類だが、僕は男子の中でも背が高い部類だ。先ほどまでは違って、今度は僕が暁を見下ろす形になった。

「はいはい、それじゃ世話になるよ。前髪ちゃん。」

「はいはいアロハ君。」

学ランの下からちらりと、愛用のアロハシャツが覗く。

(3)

たまに誤解している人がいるけど、僕は女の子に興味がないわけじゃない。

もし可能なら僕はこれから両脇に女の子を侍らせて生きていくくらいだ。もうハーレムハーレム。酒池肉林。まあ、僕は自分がそれほど魅力的ではないことは重々に承知しているけれど。

だから僕がその時相合傘をしていた女の子に対して不埒な気持ちがあったかなかったかと言えばまああったわけだけど、それは年頃の男子高校生が年頃の女子高生に抱く通常の感情と大差ないわけであって、特別僕がエロいとかそんなことはない。僕はエロくない。えっと、要するに何が言いたいかと言えば。

僕にとって彼女は純粹に、気になる存在だったということだ。人間から、世間から疎まれがちであった僕にとって、普通に接し、普通に話しかけてくれる女の子は奇様な存在であった。

あれはなんだったのだろう。どうして僕のような人間と関わってくれたのか、今となっては彼女の口から聞いてみることもできない。ただまあ、後から聞いた話では、彼女にとって僕は一つの重大な要素だったらしい。忍野メメと言う存在が自分を変えてくれるかもしれない、忍野メメという存在が自分を救ってくれるかもしれないと、期待していたそうだ。

そんなことも知らない僕は、彼女の存在が鬱陶しかった。理解がなかった。不思議だった。気になった。興味深かった。特別だった。

支えだった。救いだった。愛おしかった。
だから。

彼女を助けたかった。

なぜ急に助けるなんて言い出したのかと言えば、まあ変な理由なのだけ。

彼女に、行き逢ったのだ。

「ドッペルゲンガー」と言うかわかりやすいか。彼女がいないはずの場所で、彼女の姿を見かけるというやつだ。

僕は何度も彼女と行き逢った。朝挨拶をした後、昼廊下ですれ違った後、放課後別れを告げた後、いないはずの彼女と何度も何度も行き逢った。

ただ事ではない。

焦った。焦りに焦った。焦りまくった。

双子か？ 姉妹か？ そっくりさんか？ そんなことを考えたけれど、そんなわけがない。

ある文豪は、死ぬ前に自身のドッペルゲンガーを見たらしい。

「ドッペルゲンガー」は死の予兆という説があった気がする。そうでないという説があったとしても、そうかもしれないのだから放ってはおけない。放っておけるはずがなかった。

僕は、彼女を助けたかった。

ただ僕は、とても、とても大切なことを知らなかった。

助けたい僕と、無知な僕。

結果的にそれらが、彼女を失う要因になってしまったのだ。

「いい？ 忍野くん。」

そう言って暁は僕を凝視した。

「今の女の子は大抵三つ編みで自己主張をするけれど、私はやっぱり顔の後ろじゃなくて、前で勝負するべきだと思うのよね。だからこそ、この前髪が生きてくるわけなのよ。わかる？」

僕は思いつき彼女から眼を逸らす。

「そうかい。まあ僕は前髪に関してはジグザグでいいと思うけどね。ほら、僕もジグザグだからさ。」

「それはボサボサって言うのよ。」

ざっくり切り捨てられた。

「忍野くん、シャフトのみなさんに謝りなさい。軸ブレもいいところだわ……。もう、出るメディアを間違えてるからこんなことになるのよ。」

そんなメタ発言はいらない。

「せっかく褒めていただいたようだけれど、残念ながらここは文字の世界なんだ。いくら僕がおしゃれしたところで、この僕の魅力は伝わらないんだよ。それに、僕は僕のことをかっこいいだなんて思っていないしね。僕は人の目の届かないところで、しぶとく生きていくつもりだよ。そっちのほうが、僕の才能を最大限活かせると思うのさ。そうだな、全国を放浪しながら都市伝説の蒐集なんてどうかな。はっはー、いかにも僕らしいじゃないか。」

僕は傘を持っていない左手をひらひらと振って見せた。実は高校を出た時からずっと傘を押し付けられている。まあ身長的にこちらのほうが都合が良いのだけれど。

「忍野くんらしいねえ……。でも何か面白そうね。ねえせっかくだしさあ、もしそういうことするなら私も連れて行ってよ。多分そういうのって一人より二人のほうが楽しいんじゃない？ はは、なんだかうきうきしてきちゃった。」

「……まさか本気で言っているのかい……？」

「あら、私が冗談言ったことあったかしら？」

マジかよ。

僕はなんとなく返す言葉を失って、しばらく黙って歩いた。

そうやってしばらく歩いて、僕の目はぼんやりと人影を捉えた。女子高生だろうか、見覚えのあるセーラー服に結ばれていない長い髪。この距離からでも、それなりに可愛い容姿をしていることがわかる。おぼろげな輪郭が一步一步近づくにつれて明確になっていく。やはりそうだ。

間違いなく僕の高校のセーラー服だった。僕と暁は授業が終わってからかなり遅くまで残っていた。こんな時間に制服で外を歩いている女子高生がいるとは、不自然極まりない。電柱に設けられた街灯が不安定に点滅している。さながらスポットライトのようなその光だった。

その中に。

“あいつ”は、立っていた。

僕は目をいつもの三倍は見開いて彼女を凝視した。綺麗な顔立ち。どこを見ているのだろう。目が虚ろである。

暁は何も言わない。

彼女の横を、通り過ぎる。

彼女の目が動いた。

彼女の目は僕を素通りして、僕の肩に隠れるように歩いている暁を見ていた。突き刺すように、睨んでいた。

これだけ降っている雨の中で、全く濡れた様子もなく立つ彼女はどこか現実離れた感じを与える。

いや、これは現実ではないのか？

通り過ぎるのに妙に時間がかかる気がする。まだ彼女の体は僕の横にある。僕はこんなに歩くのが遅かっただろうか。以前暁に置いて行くなと怒られてから気を付けてはいたが、ここまで遅くなってしまうとは。はっはーこれは逆に暁に早く歩けと言う必要があるな。

あと少しで僕は彼女の体を通り過ぎる。

あと少し―その間に、僕の耳はしとしとと降る雨音に紛れた彼女の声を拾った。

―死ねばいいのに。

淡泊な彼女の声。

自分の中に、怒りに近いものを感じる。いや、怒りではない。…嫌悪？

僕はどこか寒くなって身震いした。思考が混乱する。落ち着け忍野メメ。要点をまとめろ。今、ここで、何が、起きた？

僕はここで一つの結論に至った。そうだ、とりあえず振り返ろう。あれは見間違いかもしれない。聞き間違いかもしれない。きつとそうだ。―暁は、関係ない。

「忍野くん。」

暁が声をかけて来た。久方ぶりに暁の声を聞いた気がする。いや、さっきも聞いたのだけれど。

「ごめん、ここからは一人で帰っていいかな。」

視線を下に落として、暁は明るい声を出す。そのアンバランスさが、彼女の心境をそのまま表している気がした。

「それは…」

「ごめん、傘は忍野くんが持っていていいから。返すのはまた適当なタイミングでいいよ。あ、やっぱり返さなくてもいいかも。……意

味わかんないね私。ははは…」

困惑した顔で、暁は僕の持つ傘から出た。彼女の綺麗な髪が、雨に濡れていく。

「おい…」

「ごめん、またね！」

振り返り、暁は雨の中を走って行く。僕は立ち尽くして彼女の後姿を見送る。

ぼんやりと暁の姿が滲み、黄昏に消えた。

「どうなってんだよ…」

僕は頭を押さえ、振り返った。

目の前に彼女がいた。

「…!!」

僕はもう一度混乱して、後ずさった。

彼女は何も言わない。にやにやしながら、僕を見ているだけである。

「…あ…」

どうする？ どうすればいい？

怒ればいいのか？ 憎めばいいのか？

彼女の前で、僕は自らの感情に困惑する。

「…」

彼女は何も言わない。

「…お、お前、暁に何をした！ 何なんだよ！ 誰なんだよ！ ふざけるなよ！」

別に彼女はふざけていない。ただ立っているだけだ。僕は自分が何を言っているかもよくわからないまま、彼女を怒鳴りつける。

「…」

彼女は何も言わない。

僕と彼女は雨の中で見つめ合っていた。

先に動いたのは彼女だった。

不意に、彼女の顔が僕の顔へと近づいてきたのだ。

「……?!」

そのまま、彼女の唇は僕の唇に重なる。

「……!!」

これはなんだ？ これは暁なのか？ 暁じゃないのか？ これは

暁の意志なのか？

意味もわからないまま、僕は彼女を受け入れる。

柔らかい感覚がした——ような気がしたが、その瞬間に彼女は消えた。

「……は？」

そこには何もない。

傘で体を覆うことも忘れ、間抜けに立ち尽くす僕だけが残された。直線の前髪が、酷く憎かった。

(5)

気が付くと、僕は、夜明家の前に立っていた。

傘を持っているにも関わらず濡れの高校生。傍から見れば完全に痛い絵だろうが、今はそんなことはどうでもいい。

暁の無事が確認できればいいのだ。それだけでできれば、それでいい。

僕は暁の部屋の窓に目を遣る。

一度訪れたことがある夜明家だが、ここまで人気の感じられない家だっただろうか。逢魔時ということもあって、何かが現れてもおかしくない雰囲気である。

事実、先ほど得体のしれないものに出会ったわけだが。

僕は玄関へと向かい、扉の前に立つ。

「…」

何を躊躇しているのだろう。ただ友人の家を訪問しているだけだ。呼び鈴を鳴らして、暁が出てきて、僕を罵倒してくれれば、それでいいのだ。

呼び鈴を鳴らす。

呼び鈴の音が家の隅々に浸透していく。

「…」

もう一度呼び鈴を鳴らす。

出てこいよ暁。僕に笑って見せてくれないか。

反応はない。

「暁…！」

僕は意を決して家の扉を開く。

鍵は掛っていなかった。玄関から続く廊下はどこまでも続いているかのように終わりが見えない。

悪い予感がする。

いや予感ではないな。

確実に悪いことが起こっている。

僕は暁の部屋へと続く階段を登る。何故か恐る恐る登って行った。早く暁のところへ行きたい。それにも関わらず、僕の足は歩みを早めてくれない。

階段がどこまでも続くように思われた。

どれだけの時間が経ったかわからないが、僕は暁の部屋の前に立った。僕から滴る水で廊下を濡らしまっている。まずいなあ、なんて謝ろうか…。

ガタツ、と何か物音がした。

「…暁!!」

僕は部屋へと飛び込んだ。

目の前に広がる光景を理解するのに、かなり時間がかかってしまった。

天井から伸びた紐。

その先は輪になっていて。

その輪は暁の首に繋がり。

暁は椅子の上に立っている。

「忍野くん…?」

暁が振り返る。同時に、暁の体を支える椅子が倒れた。

無我夢中とはまさにこのこと。

よく覚えてはいないが、暁を地上へと連れ戻した。首を絞めていた紐の強度がそれほどでもなかったのが幸いだ。暁の足にしがみついてジタバタ足掻いている姿はきつと無様極まりなかっただろう。あまり思い出したくない。

「ゲホッ…ぐ…」

暁はその場に座り込んで激しく咳き込んでいる。一瞬とはいえ宙に浮いた負担は相当なものであっただろう。首の周りにはくつきりと跡が残っている。

暁は勢いよくこちらに振り返った。目に涙を浮かべている。何がそこまで暁を追い詰めてしまったのだろうか。僕の胸が何かで一杯になる。

暁の口が動いた。

「ちょっと死んだらどーするのよ!」

…?

どこまでも間抜けな高校生の姿が、そこにはあった。

「ええ…？」

「あ、いや…えっと、その…」
しかも二人。

「はあ…：お前何やってんだよ…」

僕はその場にへたり込んで、深い溜息を吐きながら暁に問いかけた。実に意味がない質問だ。

「：見てわからなかったかしら？」

暁の苛立ちを含んだ声が帰ってきた。

「：首を吊ってるように見えたけど実は死ぬつもりはなかったって
いうことはわかったぜ？」

「：わかってるなら聞かないでよ。」

暁は膝を抱えて俯いた。いつもの気丈な暁は影を潜めてしまっている。

「いや、僕が聞きたいのはだね…」

「どうして自殺の真似ごとなんかしてるのか？」

暁は僕の質問を先読みして笑う。

「はは、そうよね。まあ気にしないで。ちょっと悩んじゃったもんだからなんとなくやってみたの。そしたら忍野くんが飛び込んできたものだから、びっくりして椅子倒しちゃったのよ。それだけ。」

「それだけ？」

僕は彼女の言葉を馬鹿正直に繰り返す。

「それだけ！ 何か文句ある？」

話は終わったとばかりに暁は自分の膝に顔を埋める。その姿に、僕は堪え切れなくなって言った。

「あるにきまつてるだろ！」

自分でもびっくりするほど大声が出た。暁の肩が、微かに反応する。

「お前がいなくなったら僕がどれだけ困ると思ってるんだよ！」

僕の声だけが部屋に響く。

暁は何も言わない。

「暁、お前がなんでこんなことしたのかはわからない。だけどさ、お前は強いんだ。こんなことしなくたって大丈夫なんだ。お前は、まだ頑張れるんだよ。」

僕は小さく息を吐いて、暁の反応を待つ。

雨が窓を叩く音が妙に大きく聞こえた。

「はは、そっかー困るのかぁー。」

しばらくして、暁は顔をあげて笑った。目を真っ赤にして、笑った。

「しょうがないなぁー忍野くんは。」

暁は四つん這いのまま僕に近寄ってきた。僕は身動きできずに暁を見つめる。

「な、なんだよ…」

「ん？ なんでもないわよ？」

暁はにやりと笑って僕に向けて手を伸ばす。

「ふふ、ごめんね忍野くん」

そう言って、暁は僕の頭を撫でた。ぼさぼさの頭に、柔らかな暁の手が触れる。思えばあれだけ一緒にいながら、暁と僕が直接触れ合うのは初めてな気がする。

ひとしきり撫で終わって、暁は僕の頭から手を離す。頭を撫でるということ、それなりに顔の位置が近い。照れる。

沈黙。

こういう時何か声をかけるべきなのかと僕が懸命に頭を回しているうちに、先に暁が口を開いた。

「そういえば、あんたはなんでうちに来たの？　傘は返さなくていいって言ったはずだけど。」

「ああーそれは…」

僕は“彼女”のことを言うべきか悩んだが、結局暁は無事だったのだから言う必要はないと判断した。

「嫌な予感がしたのさ。とびつきり嫌な予感がね。」

僕は適当に理由を話す。あながち間違いでもないし、まあ“彼女”にしたってそうだ。“彼女”が暁に何かをしたわけでもないのだ。僕は立ち上がり、暁を見下ろす。

「じゃあぼちぼち僕は退散するとしようかな。前髪ちゃんが無事なものもなかったしね。」

僕は徐々に日頃の調子を取り戻してきた。安堵感だろうか。緊張の糸が緩んだのがわかる。

しかし、緩んでいられたのは一瞬だった。

「…あいつを見た？」

自分の体が緊張するのがわかった。

「…あいつ？」

「あいつ。」

僕は暁の言葉を繰り返し、暁も僕の言葉を繰り返す。

「…あいつって誰だよ。」

なぜか誤魔化してしまった。暁の言う“あいつ”が誰なのか、本当にわからないわけがない。

「いや、わからないならいいのよ。ごめん。」

暁は僕に笑って見せた。

“彼女”は誰なのだろうか。

夜明家の玄関を出たところでふと考える。

―死ねばいいのに。

確かに彼女はそう言った。あれは誰が誰に対して発したもののなのだろうか。そもそも彼女は誰だ？ 見た目こそ：

そこまで考えたところで、僕の目は人影を捉えた。すっかり日が沈んだ闇の中、今度は街灯の下でもないのに、彼女の姿は浮き上がっているかのように鮮明だった。まだ降り止まない雨の中、セーラー服で、結んでいない長い髪、直線の前髪。

寒い。何かを言いたくても、言葉にならない。

「あ…あ…」

彼女は何も言わない。ただ黙ってこちらを見ているだけである。何分そうしていただろう。

彼女の表情に変化があった。

にやりと、笑った。

醜く歪んだ、笑顔を見せた。

「…暁！」

僕は今出て来た扉を乱暴に開け、走って暁の部屋へと向かった。先ほどと打って変わって、僕の足はあつと言う間に暁の部屋へと導いてくれた。

暁の部屋の前に立ち、ドアを乱暴にノックする。

「暁！！ いるか？！ すまん少し話があるんだ！！」

さっきは飛び込んだくせに、なぜ今回は律義にノックしているのだろうか。そんなことを考える余裕も僕にはなかった。

ノックを繰り返しドアノブを何度も動かすが、扉が開く様子はない。

「くそがつ！！」

僕は強引にドアを蹴破った。

いくつかの木片を飛ばして、ドアが開く。

僕は部屋に飛び込み、暁の姿を探す。

しかし、僕の予想に反して暁の姿は宙に浮いてはいなかった。椅子に座って、机に突っ伏しているだけである。落ち込んでいるのだろうか。

「なんだよ…いるなら返事しろよ…」

僕は気が抜けて、部屋を見渡す。そこで初めて、異変に気づいた。白いはずの壁紙が、赤い。

それは、何かをぶちまけたようで。

乾ききっていない液体は重力に従って下方に範囲を拡大していた。暁の突っ伏す机の上に、赤い水溜りが広がっている。それも壁の液体と同じように机の表面を侵食していく。

「……」

僕は声を漏らすことすらできない。

机の天板を食いつくした液体は、机の端から滴となって床へ落ちた。

それに触発されたかのように、ズルリと、暁の体が椅子から崩れ落ちた。

暁の顔が僕の方へと向く。

ああ生気のない目ってこういうことなのか。見開いた目は瞬きもせず、視線が泳ぐこともなく、じっと僕の方を向いている。

向いているだけ。

顔面にぶちまけられた液体が暁を真っ赤に染め上げていた。締まりなく開いたままの口が、暁の筋肉が機能していないことを物語っている。

落ちた衝撃で腕があらぬ方向に曲がっていた。しかしそれを気にする様子もない。今の暁には痛くも痒くもないのだ。

僕はただ暁の様子を窺う。

さて、散々話を逸らしてきたが、ここを見なければならぬだろう。

暁の喉元。

皮膚と皮膚の間に大きく口を開け、液体を吐き出す鋭利な裂け目。

切り裂かれた暁の頸動脈。

なんだこれ。

何かの間違いだろう。

夢か。そうだ夢か。

全く夢オチとはね。はっはー古臭い手を使うよ。

こんな悪い夢は今まで見たこともないね。僕も大分疲れているらしい。そうだ寝よう。夢の中で寝るってのもなかなか悪くないんじゃないかな。夢の中だしここで目を閉じたっていいだろう。だって夢なんだから。明日には暁がいつも通り僕に悪態をつきながらにやしてたりするんだ。

きつと、そうだ。

僕は目を閉じた。

(6)

僕は目を開けた。

公園。陽が昇ってしまっている。どうやら公園のベンチでそのまま寝てしまったらしい。

不思議なことに、公園内には誰もいない。割と広い公園の中で、僕の姿は完全に浮いていた。合成写真で後付けされたかのような、居心地の悪さを感じる。

ああー…。

僕は力なく呻く。

何かを忘れている気がする。とても大切なことのような気がする。しかし一向に僕の頭が動き出す様子はない。

真っ青な空に飛行機雲が伸びていた。

あ、そうだ。学校に行っていない。

これはこれは、大切なことを忘れていた。まあ、いいか。なんだからそんな気分でもない。

僕はゆっくりと立ち上がり、公園の入り口へと向かった。今日は適当にぶらぶらして帰ろう。そうしよう。

僕は決意を固めて歩き出した。

体が重い。気分も重い。今日だけ地球の重力が三倍になっているのではないだろうか。このまま地面に張り付いてしまいたい。

重い足を、一步一步前へと運ぶ。

緑の濃くなった樹木も、色鮮やかな遊具も、どこかモノクロに見える。ああやっぱ僕は疲れてるんだ。もしかしたらまだ夢の中かも知れない。

そろそろ公園の入り口に辿り着こうかという時、僕は背後から視線を感じて立ち止まった。確かこの公園には僕しかいなかったはずだが、子どもでも隠れていたのだろうか。まあどうでもいいか。いや、一応振り返るべきか…。

随分と適当な思考を巡らせてしまったが、結局僕は振り返った。振り返ったそこに。

“僕”が、立っていた。

何なんだ。

お前は誰だ。

何をしている。

質問が次々と僕の喉をつまらせる。しかしそれらはつまらせるばかりで、全く僕の口から出ようとはしない。

口をぱくぱくと動かして、僕は意味不明な動作を繰り返す。

その様子を見かねたのか、嘲笑ったのか、特に意味はないのか。“僕”の表情に変化があった。

にやりと、笑った。

醜く歪んだ、笑顔を見せた。

僕の頭に、何かが流れ込んでくる。

雨の降る夕方。セーラー服の少女。結ばれていない長い髪。直線の前髪。暁の部屋。天井から吊るされた紐。闇に浮かび上がる少女。少女の笑顔。真っ赤な部屋。机に突っ伏す暁。

暁は椅子から崩れ落ち、僕の方に顔を向ける。

血で塗られた、暁の顔。

「あ…ああ…!!」

僕はその場に膝をつく。

頭が痛い。気分が悪い。体が重い。息が苦しい。

「あああああ!!」

目を閉じていないのに、目の前が暗くなる。

薄暗い視界に、“僕”を捉えた。

いつの間にか真顔になって僕を見下ろしている“僕”。呆れているのか。嘲笑っているのか。憐れんでいるのか。如何様にも取れる表情は僕を混乱させていく。

頭が割れそうだ。僕の脳は処理能力の限界を迎え、悲鳴をあげて活動を停止していく。

「ああああー全く世話が焼けるよ。“僕”ってこんなに脆いのかね？」

僕の声が僕の耳に届く、独り言か。“僕”の言葉か。その区別もできなかった。

(7)

寒い。

僕は我に帰り、辺りを見回した。何も変わっていない。先ほど膝をついてうずくまった場所から一歩も動いていないし、長い時間が経った様子もなかった。ただ違うのは、“僕”がいる位置だけ。

「やあ待ちくたびれたよ。僕が目覚めるのを“僕”がどれだけ待っていたかと思っているんだい？」

ジャングルジムに器用に体をはめ込んで仰向けになっている“僕”がいた。

「うーん、結構前から、具体的には前髪ちゃんの影を見つけた時から思っていたのだけれど、僕たちって呼称がわかりづらいよね。前髪ちゃんの影を“彼女”って呼んだり、僕が“僕”の事を“僕”って呼んだりしちゃってさ。はっはー“僕”って言葉がゲシュタルト崩壊しちゃうそうだよ。というわけで読者の皆さんや筆者自身が混乱しちゃう前に便宜上別の呼称を決めようと思うんだけど、“僕”はなんて呼ばれるべきだと思う？」

ジャングルジムの上から“僕”は質問を投げかけて来た。別に僕は分かりにくくなって思っていない。

第一“僕”は何者なんだ。

「返事がない。ただの屍のようだ。」

“僕”は某RPGの絶望的なセリフを真似て言う。時代的にあつてゐるのか？

「じゃあジャングルジムの“僕”が僕で、下の僕が屍ね。はっはーわかりやすくなったじゃないか。」

「…それはやめろ。」

僕は絞り出すように声を出した。やっと出した声が呼称への反論とは。僕をとてつもなく惨めな気分が襲う。

「お、反応あり。いやあやっぱり僕はそうじゃないとね。じゃああんまり意地悪しないで、素直にジャングルジムの“僕”が影で、下の僕が僕ってことにしよう。要するに君が『本物』ってことでいいよ。」

“僕”改め「影」はジャングルジムの上で器用に体を反転させ、うつぶせになって僕を見下ろす。

「うんうん、やっぱり呼称が区別されると二人称でも呼びやすくなるね。」

そんな鉄骨の上に寝て痛くないのか。溢れるほどあつたはずの質問も忘れ、非常にくだらない疑問が僕の頭に浮かぶ。

「混乱しているね。まあ仕方ないか。前髪ちゃんのあるところを見た後だしね。しかも君は前髪ちゃんがあんなことになったのは影のせいだと思っっているみたいだし。」

影は飄々と言葉をつなげる。

「影」とはなんだ？ 漸くまともな質問が浮かぶ。目の前の僕と同じ姿形をした影は、僕の反応を楽しむかのようににやにやと僕を眺めている。

「ああ、そうだ。どうせ聞かれるだろうから、先に僕のことを説明してあげよう。あ、ここでの僕は影のことであって君のことじゃないからね。」

影は僕のことを見透かしているか、先読みして説明を始めた。

「先に大切なことを言っておくけど、影は『ドッペルゲンガー』じゃない。影に出会った人間が必ずしも死ぬわけじゃないし、影と死は本来関係ないのさ。影は影。光が当たれば、君たちの足元には黒いもう一人の自分が生まれる。それが影。ただそれだけさ。世の中には影踏みなんて遊びがあるけれど、あれは中々難しいよね。自分だけじゃなくて影も逃がしてやらなきゃならない。でも影は思うような場所にできてくれないんだよね。あれって実は思い通りにならない自分を自覚する遊びなんじゃないかなーなんて深読みしちゃうよ。まあ最初に影踏みを始めた人間がそこまで考えてたとは思わないけれど。」

「ああいけない。そんな話じゃなかったね。はっはーそんな怖い顔をするなよ。全く元気いいなあ。何かいいことでもあったのかい？ふ、まあいいさ。君は僕だし、僕は君なんだ。僕に怒りを感じるってことは、自分に対して怒りを覚えているのと同じなんだ。どうも君はそのところが理解できていないようだね。もう一度言うよ？僕は君の影なんだ。要するに僕は君なんだよ。だから僕の記憶と思考は基本的に君と同じだし、体格も体力も一緒だ。ちよつと違うのは、僕には影としての自覚があるってことくらいかな。だから君も、今僕から影の説明を聞くことで僕と同じ思考ができるようになるはずだよ。」

「む、その顔は『じゃあ暁はなぜ死んだのか』って顔だね。全く君は前髪ちゃんばっかりだなあ。いやわかってるけどね。僕だって影としての認識がなければ前髪ちゃんの死に様が強烈なトラウマとして残ってたと思うよ。それにしても前髪ちゃんは不思議な子だったねえ。なんで僕なんかに関わってたんだろうね。僕に関わらなければあんなことにならなかったかもしれないのに。」

「そうそう、言い忘れてたけど、僕には前髪ちゃんの影のことはわからないからね。僕が前髪ちゃんの影と同じ影なのか、それとも別の影なのかもわからない。少なくとも僕には前髪ちゃんの影だった

記憶はないから、違うのかもしれない。もしかしたら記憶がないだけで前髪ちゃんの影だったのかもしれない。うーん考えるの面倒だね。とにかく、僕に前髪ちゃんのことは聞かないでくれ」。

「だからまあ、これはあくまで僕の見解なんだけれど、聞く？ まあ聞くよね。というかこれは君の見解でもあるんだ。今君の頭は思考停止中のようだけれど、僕が話した影の情報を踏まえて考えれば同じ結論に至るはずだよ。」

「じゃあ前置きはこれくらいにして、話すよ？ 結論からいって、前髪ちゃんは自殺。自分で自分の喉を掻っ切ったんだろうね。君は見なかったことにしてるみたいだけれど、机の上にナイフが置いてあったし。多分、前髪ちゃんは結構自殺未遂常習犯だったんじゃないかな。首吊りの件にしてもだ。あれは何となくでできる準備じゃない。以前にも何度か試してたはずだ。紐の強度に問題があったのは、どこかで死にたくない気持ちが残ってたからだろうね。いや当然だよ。死ぬのは怖いもんね。」

「じゃあなんであの時前髪ちゃんは死んでしまったんだろう？ 僕の推理だけれど、前髪ちゃんが前髪ちゃん自身を許せなかったからって感じかな？ 今の前髪ちゃんと前髪ちゃんの理想の前髪ちゃんとは、きっと違うものだったんだろうね。全く理想が高い子だよ。理想の前髪ちゃんってどんなものだったのか、僕は想像もできないや。あんなにいい子滅多にいないと僕は思うんだけど。なんでなのかなあ？ 苦しかったのかなあ？ん？ 僕今何か重大なことを思い付きそうなんだけれど、何だろう？ 君わかる？」

「あ、何も言わなくていいよ。何か自分で思い付きそうだし。んー…あ、そうか。はっはー大事なことを忘れていたよ。前髪ちゃんは自分が苦しいから死ぬような人間じゃなかったね。なんていうか、修行してるような人間だったもんなあ。ということは、修行しても、どうやっても、理想にたどり着けないって悟ってしまったってことなのかな。しかしまあそれはそれで重大なことかもしれないけど、だからって死ぬことかなあ。僕には理解できないね。なんだっけ、

『死に至る病』。なんだったかなあ？　まあいいや。あれにでもかかったのかかな？」

(9)

「……。」

僕は拳を握りしめる。自分の爪が掌に食い込むのがわかる。

「影……」

「なんだい、忍野メメ。」

腹立たしいほどに、影は余裕に満ちた反応を見せる。

「暁は、暁は……」

僕は言葉に詰まる。今から発する言葉が自分を一生苦しめることになるだろうことが想像できた。それでも、僕はこの現実と向き合わなければならないのだ。

「僕のせいで死んだんだ……!!」

影が、にやりと笑う。

「どうして？」

「暁は理想を求めてた。それは全て、他人から認められるためだった。」

「それで？」

「僕は暁に頼ってた。暁は僕に頼られ、認められることに甘えていた。そこに向上はない。暁にとってもっとも許しがたい状況を、僕が作った。」

「そう。」

影の口調はどこまでも軽い。真面目に話を聞いているのか疑わしいほどだった。

「だからって死ぬほどかな。」

「他人から認められることが、命懸けの目的だったらいけない理由でもあるのかよ！」

僕は影に向かって言う。

「お前は暁のことを何もわかってない！」

「だったら。」

影が僕の声を遮った。予想外の鋭さに、僕は口を噤む。

影はするするとジャングルジムから降りてきた。僕と同じ背格好なのに、どこか威圧感を感じる。

「君がそれほど暁のことを分かっているんだったら、もっとするべきことがあっただろ？」

影の声は、無情だった。

「忍野メメ。僕は忍野メメの影。いわば僕との会話は自問自答だ。その答えは君がちよっと考えれば捻りだせたはずの答えなんだよ。それをせずにのうのうと生きていたのは君だ。暁も自分の影を見た。自分を見つめた。そして絶望したのさ。死ぬまでは考えていなかったみたいだけど、あの場所、あの状況で君が現れたのは最悪だったね。自分の影を見て絶望する子だ。自分の絶望する姿を君のような自分を頼る人間に見られたんだもの。それはそれは辛かっただろうね。暁は君から認められないことを最も恐れていたようだし。君がああの場所に現れなければ、暁は暁なりに違う生き方を見出せたかもしれない。暁は君を見誤ったね。その見誤ったという事実もまた暁を苦しめたことだろう。暁にとって君は異質だったのさ。端的に言うとうまくわからなかった。そんな君との出会いが自分を向上させると信じて。ところが現実はどうだい？ 君という存在に甘えて、生き方を乱されてしまった。これは残酷な現実だねえ。」

言い方こそ軽いが、影の言葉は重く鋭い。

僕が、暁を殺したんだ。

何かを大きく変える必要はなかった。何かを違う捉え方をすれば、お互いに明確な意思があれば、事態は変わったはずなのだ。

「ああ、そうだ。自分で言っていて思い出したよ。『死に至る病』。それは『絶望』だったね。」

はは、軽く笑ってみせ、影は僕の横に立った。

「さあ、忍野メメ。」

影が僕と肩を組む。

「君はどうする？　これからの君は背負うものが多いよ。」
「そうだなあ例えば…」

「自責」

「幻滅」

「失望」

「嫉妬」

「後悔」

「憎悪」

「嫌悪」

「憂鬱」

「落胆」

「恐怖」

「殺意」

「悲哀」

「悔恨」

「絶望」

「とか。まだあるかな。まあそういうものが」

「君を寄って集ってすり減らしていくんだ。」

「それでも君は何かするのかい？」

「悪いことは言わないよ。」

「死ねばいい。」

(10)

気が付くと僕は影に掴みかかっていた。

自分と同じ太さの首を自分の腕でじりじりと絞めていく。

「はっはー元気がいいね。しかし困ったなあ。不思議なことに僕は君がなぜこんなことをしているのかわからないんだよ。おかしいな

あ自分のことなのに。」

影の首を絞める僕の手は全く力を抜いていない。しかし影は全く苦しむ様子も見せず、飄々と言葉をつづけて見せる。

「君はどうするんだい？　僕をこのまま殺したとして、そんなことは全く意味がないよ？　確かに僕は消えるけれど、君の中には僕がいるんだ。君を死へと導く僕がいるんだ。僕は君の足元から離れることはないよ。」

影の首を絞めるリアルな感覚が僕の手から伝わる。これが人を殺すということか。結局僕は暁をこうやって殺したのと同じか。

「僕は。」

何かを嘔み潰したような感覚がする。それは苦虫か、はたまた自責の念か。

「僕は全部背負って生きていく。僕がしたことを、してしまったことを、全部呑み込んで生きていく。ここで荷物を降ろしたりはしない。」

「ああそう。それは結構。」

影は呆れたような、諦めたような声を出す。

「暁は自分の意志で死んだんだ。僕が助けたくても、助かろうという意志がない人間は僕には救えない。人は勝手に助かるだけなんだ。」

「そうかい。まあそれはそうだ。君は暁に関わった。暁の選択に関わった。暁を構築する要素になった。それは重大なこともかもしれないが、それだけでもね。暁は暁の意志で生きていかなくちやいない。全く君は関係ないよ。」

その言葉に僕は影の首を絞める力を強くする。影の体が一步後退した。

「おいおい、なんでここで力が強くなるんだよ？　本当に意味がわからないなあ君は。」

影の体はじりじりと後退し、ジャングルジムへと押し付けられた。「関係はある。暁が死という選択をしたのは暁の意志だが、その選

扨肢を作ったのは僕だ。暁は僕を死への要素として捉えた。僕は暁を殺してはいないが、死なせはしたんだ。」

はあ、と影は息を吐く。

「…結局何が言いたい？」

影は澄ました顔で質問してくる。もう答えがわかっている顔だった。

僕は少しだけ息を吸って、はっきりと言った。

「被害者面が気に食わねえつつてんだよ。」

はは、と影は短く笑った。その顔はどこか満足気でもある。

「その言葉、自分に向けられていることを忘れるなよ。」

僕は黙って、その言葉を受け入れる。

影は首を絞められたまま、僕の肩へと手を置いた。

「君は死なないという選択をした。それはそれで立派な選択だよ。」

だがそれは同時に、弱さでもある。いるかどうかは知らないが、もし、泣きながら死を選び、笑いながら生きていけるやつがいたとしたら、君はそいつにはかなわないぜ。」

そうだろうな、とは僕は口に出さず、影の目を見つめることで答える。

「はは、さよなら忍野メメ、何かいいことあったらいね。」

先ほどまでどこか力の入り切らなかった腕に突然力が入った。一気に影の首が絞まる。

その時、影の顔から忍野メメの形が失われた。粘土をこねて形作るかの如く、新たな形が現れる。

「忍野くん。」

直線の前髪。結ばれていない長い髪。

新たな顔になった影は僕の間を見つめ返して、震える唇を動かした。

「ごめんね。」

僕は手の力を緩めない。緩めたら、全てが無意味になってしまう気がした。

僕は一言だけ、「絶望」の対極にあるらしい言葉を返す。

「いいよ。」

人を殺す感覚。

影の姿がいつの間にか消えてしまっても、それは僕の手からいつまでも消えなかった。

(11)

後日談というか、今回のオチ。

僕の話聞き終わったキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードもとい吸血鬼の残りカスは、特に反応もせず僕を睨んでいるだけだった。まあ何かと突っ込まれるよりも、放置されるほうがいい。別に放置プレイが好きなのではない。

「あ、この話を阿良々木君にするのはやめてくれよ。きっといつまでもこのネタでいじってくるだろうからね。」

目の前の金髪少女は何も言わない。

「うーん不安だなあ：そうだ、君に名前をあげよう。そのヘルメット（ゴーグル付き）だけじゃ物足りないだろうしね。何がいいかなあ：」

本当に褒美として名前を与えるわけではない。名前で縛る。これは基本的なことだ。なぜ今までしていなかったのか、我がことながら不手際である。

「刃の下に心あり：忍、なんてどうだろう。はっはー我ながらこの上ないナイスなネーミングだ。名字は僕の物をあげよう。忍野忍。うん、なかなかいいじゃないか。短くなったし。」

金髪少女は何も言わない。まあ最近はそもそも声すら聞いていないのだが。

映し影。

僕が初めて出会った怪異。

その出会いからもう何年も経ち、僕は怪異の権威と言われるまでになった。だからと言って、暁は戻って来ないし、何かが報われるわけでもない。

ただ僕はバランスを保つだけのことだ。

「助ける」のではなく「力を貸す」。人は勝手に助かるだけなのだから。ただそれだけ。そこから先のことは僕の知ったことでない。忍野メメという要素が加わっても、助からない人間はいる。

暁は、助からなかった。

それは、僕に貸す力がなかったこと、暁に助かる意志がなかったこと、偶然にもそれらが重なった結果だ。

映し影と向き合った人間を、助けてはいけないのだ。映し影と向き合って助かる方法は、文字通り「助かる」ことだけなのだから。

それにしてもまあ、僕は影になっても軽薄で嘔吐きだったとは、我が事ながら地味にショックだ。

何が「前髪ちゃんのこととはわからない」だ。お前は暁でもあったんじゃないか。

人間はどうやっても一つになれないけれど。

影は闇の中で、一つになれるのだ。

まあそれに気付かなかった僕も、なかなか愚か者だったと言わざるを得ない。

「忍野。」

教室の扉が開いた。ボロボロの扉は痛ましい悲鳴を上げながら少年の登場を演出する。

「やあ阿良々木君。待ちくたびれたよ。」

男子高校生にしてはやや身長の低い少年に、僕は声をかける。「吸血鬼もどきの人間」阿良々木暦。彼はこの時代にまさかの吸血鬼と出会うという奇行をやったのけた少年である。僕は正直なところ阿良々木君に敵う気がしない。

「おや…」

僕は阿良々木君の後ろの女の子に注目する。背丈は阿良々木君と同じくらいの、ツンデレっぽい女の子である。

そして驚くべきことに。

前髪が直線だ。

はっはー。

暁、君が正しかったね。

（後書き）

小汚くて胡散臭い中年のおっさんが個人的に非常に好きで過去とか気になっていたのですが原作でもアニメでも描かれそうにないので自分で考えました。「人間臭い」忍野さんが見たかっただけです。すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5143t/>

化物語－忍野ゲンガー－

2011年5月24日00時40分発行